

塩尻

二十八

大政官文庫			
		一	和
		一四	書
六	五	九	門
五	二	一七	
冊	架	函	號

內閣文庫			
		一	和
		一四	書
二	一	九	類
二	六	七	
一	函	冊	架

內閣文庫			
番號	和	11497	
冊數	65	(28)	
函號	211	302	

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 cm

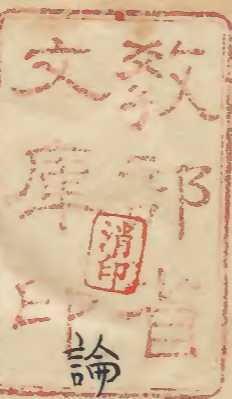
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

G Y M

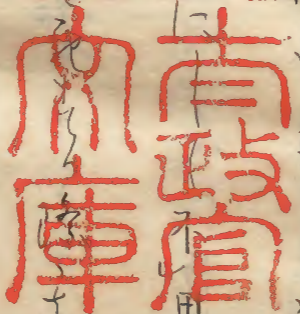
© Kodak 2007 TM Kodak





論語衛靈公篇乃朱註史魚以尸諫ノ西華云乃時蓋

伯玉賢ニ用ノ孫子瑕佞ニ一仕事史魚名



進免佞ニ退ニ不能一死後ヲ成ニ爲ケ

此尸ノ北堂ニ到ク是ヲ死ニ生テ吊ハ尸ト見

怪問セ事ヲ言フと啓セ一ニ容ヲ失シ一テ

目ノ寡人ト言フとシ也ト伯玉ト言フ一孫子

見ル一ト事ヲ故ニ孫ト一直

二十八 内 一二七九〇號

官心一鳴呼剛正不阿に一一一諫諍ところふく
推諫して屈抑して直する多し如く徳惠を
以て慮とて次逆に節をふる人への詢はす
礼死生を以て己の志を伸べると亦烈なり
いふ徳紀のこ憂ふ男色を以て賢人との比
らまし一しと尸諫を以て政を以て
よの後乃人に臣して若我君不徳とく止ふん
うゝの徳を以てはく亦怒る此年強相國始る

仍不善乃事多の思し、平の政秀死諫乃後
を以てふの一一一

孔子之戒

少色好壯剛争老得貪、此を以て戒めたり

之畏

天命畏大人慢聖言侮此の横に畏き多し

人淫に寝る時を疾死し然に魚の氷に安し人本
人に處ハ惴慄を知らず獲ハ樹よ安し毛嫱麗姫美人

人羨と一して心と愛はるる鳥鹿はこれとて
飛強とてと濬園老人の言ひにけにさる事と
名利と欺捨して山林に入る者ハ世路とて
汗流乃如くに心より身より学と貪まらる人
心と心と心と心と心と心と心と心と心と
愚賢不肖乃毎々反せらるる先づかき

金仲堂の上人舟養濃園北洞乃山如く真性蓮花
に退治せしは五月十九日明年の海ふれむはいかに世

名はつぎせしめて道行し行

別まのこの心乃まるとも定るは世とてのまのものと

訪海老師山隱之居

拂袂松風笑獨清

柴扉期待紫雲迎

幾年忘了人向事

眠對層山聞鳥声

瑞峯ゆほ一舟乃思却香まもつとく人しく親

みし心も思ひし心

流る心耐る一舟に舟とて行かぬぬの夜

或人の我國古(官漏)新(玉鼓)の事して十二時

昔不知候(障)と撞し(時)と知(し)る(事)何(の)以(て)代(る)

何(の)中(に) 吊(り)白(練)抄(日) 大治二年 陰陽寮(編)刻(株)清

焼(亡)云(々)世(障)ハ(植)武(帝)迄(故)乃(時)化(と)海(邊)一(不)

地(ノ) 三百三十一 我(上)久(少)也(時)乃(清)河(と)是

之(を)但(し) 子(始)を(不)知(ぬ) 桓(成)乃(時)

荒井(筑)後(者) 名ハ瑤字ハ君美 白石ト号ス 蕎麥(麩)乃(詩)

之(洛)礎(玉)屑(白)能(々) 素(餅)團(四)月(様)兵

芦(倒)孤(剛)吟(雪)下(ラ) 蓬(凱)平(野)捲(沙)来(ル)

鷹(刀)探(處)敗(絲)乱 翼(釜)烹(烹)時(景)浪(堆)

菜(菰)葦(葱)立(仇)候 肯(將)麻(飯)訪(天)心(コ)フ

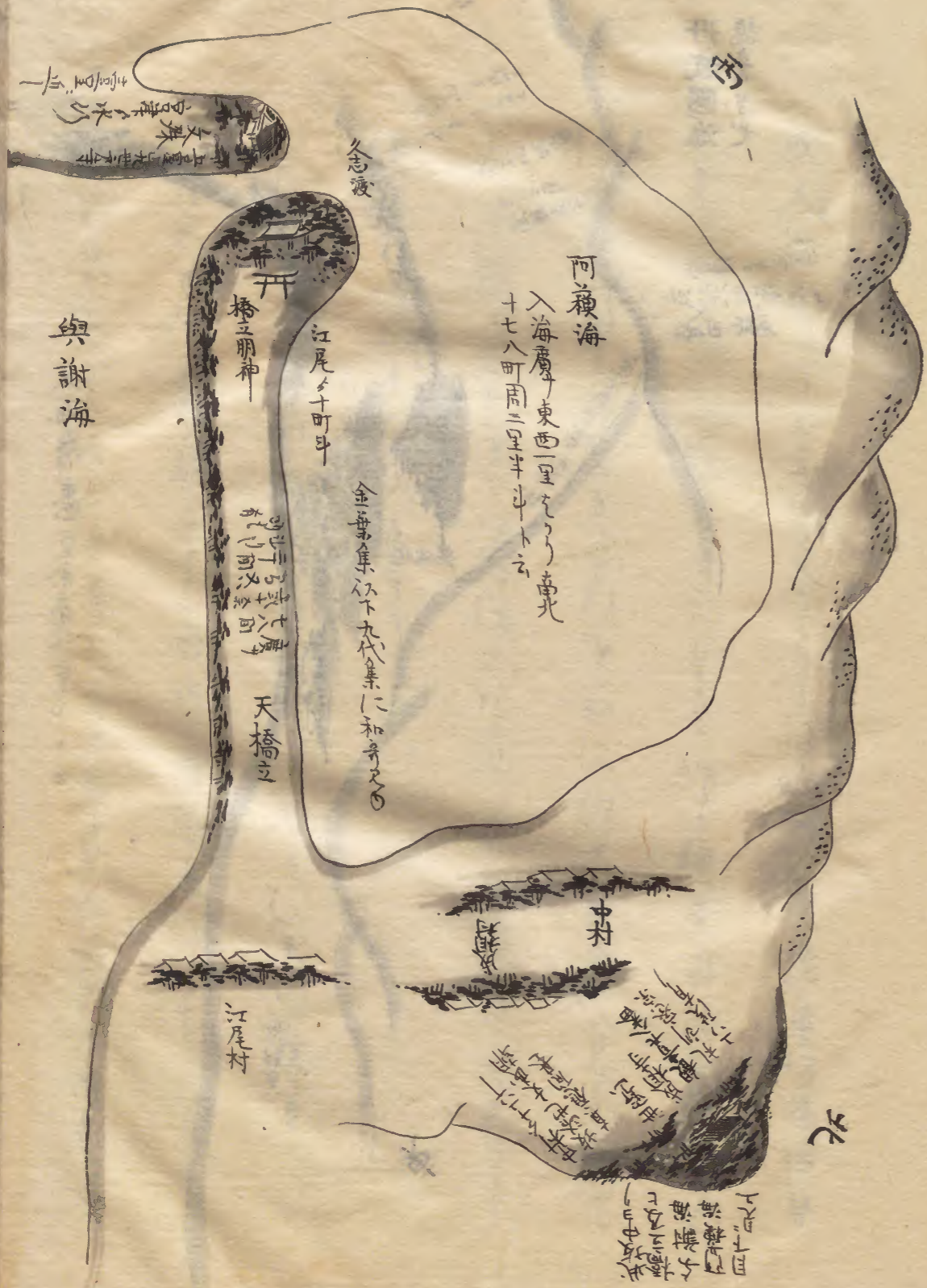
く(か)る(る)世(世)也(也)河(漏)と(と)是(是)乃(乃)事(事)と(と)り(り)と

と(と)製(製)異(異)ふ(ふ)と(と)く(く)と(と)は(は)何(何)の(の) 饅(饅)頭(頭)と(と)甲(甲)州(州)

天(目)山(山)ト(ト)也(也)初(初)ア(ア)一(一)と(と)ウ(ウ)マ

辛(丑)六(月)四(日) 傳(教)大(師)九(百)年(也) 冥(忌)に(一)一(一)

比(叡)山(山)法(會)行(り)れ(行)る(る)事(事)と(と)り(り) 名(宗)の(位)也(也)と(と)り(り)



我國自戒乃為觀舟幸喜母經とよ〜織法を傾〜
香〜

大鵬搏風冥海吼

怒声震起走龍蛇

涼雲洗出又四明月

沛雨長完五嶽花

中火化せしとく人々奇異の事にして自伝はり火を焼
その時と同意し自
傳と唱へて後世でさしひつるも練て近世に本人良流りしとてこれを
上ナ城名徳捨此ふ事にしてもつ神妻世り者様
いしてこの世を捨ひるんごめれ丈夫にして死を思ふ
半一歸らうことくぬしとてもく堆場界に世を
魔乃をよ奇特を現せしとてかきくことしとて
に捨身志何し人知れぬ山谷もつるよのつ
為乃中に事と生し臨ま乃同答もいとむり

くく辯世の傳をよ名づけふことにかつた
道化よりふれも禪子神事とてしるすはる
之亦知りて業結乃果はるふらん
或人の我同大定之味乃例を々と曰投業略記
治曆二年五月十日地條に由修坊叔迦堂ノ住
僧文豪於鳥部跡焼し身とてつる文元云ノ教書
よく吉備の定乃初は長段也傳乃東地野の外
焼身乃人ありてや管見もるもつるはるはる

愧の心ふくや作のむに身くそ末代の芳楨新
生降土乃教口福念佛の行いとくこのまに
け付よ作のまにこまをけに證を得ふん事
むおぬつうあつ作

和信家の福号と名号と呼号と通冊名と字
と乃中一とんはるつうあつ作
書ハ却て誤まつるまに
みせし者もつる里本貫の各田乃字と呼し

よと名号と云 伊後天北北条
等の如し 人乃名と字よとくし

たどくその若くあつて呼もはし

人乃名と云 一系殿九條殿と云六波羅
入道鎌倉古大臣等の如し 乃家の福号と

山院徳大寺ふとつとん徳大寺と云

つとんふし通冊名号に云と云武田氏長尾

云と云と云書にこふた事ふり世に又これ

と姓少書林家乃字と云姓ハ林ふと記せりい

さや姓氏ハむしと云と云換りてはるこの如

今日新之氏も姓も云んといふと忌憚申す所
乃甚しきに何れも俗字希ふ所なり此ハ唐
凡乃詩ふとに似けぬ、倭号と書し雅ふり
故に姓と書と云ふは少くも申すに似
書乃名を誣せりといふれ何れも果て
此代体俗乃雅ふりぬと記さるるを何と唐
此と云り少くも八居頭詠に泉州乃高人唐令
至志(名ハ魚澤)別号梅初、乃姓と唐令と書し修

て真の筆ハ、
筆一何

山城國相楽郡訪記日本に或も綺回村と書中右
記にも加波多とあり書にてもある紙幅
と記し、これ蟹帳と書りて蟹海
多寺乃名に依りて、蟹海寺の故事、處女
と地とんとてに蟹海乃地を殺せり
源若圃集人首物須元京叙書ふ

てしきんじ極まらばにき素盞尊とて地を斬り稲田
娘とて次もまひし有半とて後を傳へて後世
乃半とて次もあつた一壽田村の神延喜ノ
神名式に綺原坐建伊邦太比賣神社と
記せるも一知れず

同郡祝園村とて何れも一轉語なり日本紀
にも有振苑と記し神祇式にも祝園神社
とありい初まらば此の處と讀む
今そこの社乃祝
祝園社とせられ

園村とて里俗にこれを村おと呼びたりと名乃一不
二号のやりにあつたりと聞かざるなり

信州松本領某乃里下地御堂あり一八十五年
世傳ありて名を傳へしに年ありに言傳
之年七月十日地倉大士乃傳いほりてあり
現存とて増上より一史ありて後鎮と
水野也乃美に之處山乃名師とて記されたり乃
代現とて一史ありて感とて一史あり

七月十日 前大僧正乃法信 祐天 ぬてくく 西遊

ふひくく 領を けく 寺を 地を けり けり

大僧正乃 門人 祐海 三人 へ 差地 けり けり

書 けり けり けり けり 自 招 請 けり けり

至 けり けり けり けり

同 年 九 月 初 旬 館 林 善 通 寺 之 次 へ 水 地 邊 へ けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり
化 けり けり

彼大僧正法信 けり けり 高徳 けり 名 天下 けり

善 けり けり 在 世 乃 寺 持 けり けり 寂 後 乃 塔 畧 けり けり

乃 足 跡 けり けり けり けり 部 部 傳 けり けり けり

けり 遺 跡 けり けり 物品 自 運 けり けり 地 けり 揚 けり 基 けり けり 明

題 山 秋 天 寺 けり 善 久 地 けり 号 けり 庚 子 七 月 八 日 大 僧 正 牙

三 回 乃 忌 辰 けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり

集 會 けり けり けり 部 乃 けり けり 妙 典 けり けり 撰 論 けり けり 撰 論

追 追 乃 佛 傳 けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり

寺 の 如 言 けり けり 大 僧 正 乃 けり けり 送 文 乃 金 利 けり 安 宅 寺 也

予も亦其經云乃縁としをひて香飯献ふと

よきことなり

法皇御道の御業の由(葉ももま)してをれは流るる

祐之康存の日十万人乃若佛念細く

まひにすを玉しきれ臺下に切す乃苦や

ふの人ましくその念をい入て日深し祿名を唱

し竹勢別松坂ありは是等とその本處に定先

まし一年にすし人乃数多し今年 辛丑

正月初忌諱に即して凡四拾一万七ふ二百二十四人

とす

寛永十七年庚に之歳内牛死する半多し

自備致法領守治郡みけの庄の民新に杯

はれとすしふるし程に此取に集りて

とふり此中はれは信よ古地乃神の如と

と法皇あり柳の林 正二位すしはと啓せし

は法皇のそはしり額丹すしとすしは

に捧げてよむ世福のしるしをいふに神祇の御事

本源自性院開白信の云
法名應心

つとめしむる柳乃神ありしをいふに神祇の御事

神ありしをいふに神祇の御事

神ありしをいふに神祇の御事

いとわろしき神ありしをいふに神祇の御事

井原家の功長菴原某十出陣乃際甚腹痛

下りしをいふに神祇の御事

錫ひしをいふに神祇の御事

命なりしをいふに神祇の御事

これぞ 法鏡まじりしをいふに神祇の御事

御事と神をいふに神祇の御事

さぬ天晴しをいふに神祇の御事

ゆきとくをいふに神祇の御事

うに末乃をいふに神祇の御事

成人としをいふに神祇の御事

念佛乃の者ハ朝夕ニ死乃ちうけり念一ハ
世々もふ一板乃茶一葉地香や信者
是もかたきと切らぬ程なりといふ
今生乃ちと絶ゆるんや物ある一
此末も命乃ちんうに支ふ一ハ厭
却て候い候に病臥せし醫者と集
初之候一命やけり候こと
るる目とつる一修世乃候況を
り

是も亦亦則と子孫と永記
て候ひ乃ちるハい
りり
母衣味とらハ
佛乃ちる抄
羅摩 信羅
新紀云鳥乃
儀と

同書九神功皇后乃御歌未利拂云云云云征矣
也新記云甲胃のりに入ましく似るし今世の
こほまうにいと云自代はあつて
の各と可少

今歳浴東真正極樂教寺真如二百日不退轉念佛
乃回向有り四月六日
十日矢方詣群心ぬり

寄捨乃教也甚多く浪立百貫文に及米穀
の石も可なりいと毎る人の飯を炊て
とふく大器大証二十なり

龍祿名乃声山野と初貴儀悲喜なり
とりて坂本西教寺八百日乃回向世は類る云
し、世交地群集及なりと京人あり
なりゆきとゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
きりぬも南無河弥陀佛と茶草園乃頓河云
うきまひとゆきゆきゆきゆきゆきゆき
隨喜ゆき

多武峯妙樂定惠和尚大織冠長子實天
豊乃天皇ノ皇子養老四年八月

三日近化境不在山城國木幡寺也之一条禪宗御
撰大織冠記に云く

世に蛇に足りしもの希に有りしと云百練抄保安三年
五月十四日此條に故二品親王白川堂善勝寺前庭
有足蛇出來為犬被喰殺と云類云々

熊野推現孝照天皇二十五年庚寅三月十五日

即出現大中臣時崇神帝六十六年己丑出現の記

ハ非云々

平東都に於て後唐天神盃像と云く東山石

栖村庵乃自盃自贊師諱ハ靈表字ハ希世惠鑑明照
禪師と謚ス

故郷に歸り三月二十五日香を捨て

唐衣如袂も乞ひ云々云々此梅乃云々

藤原南家乃祖氏智磨云々千二ル或ハメケ千二ル

云々讀ハ非ハ日本紀私記望ハ古者謂尊貴為氏

智ト云

云々千二ルと云ハ大日靈貴の貴の云々云々

西行法師乃息度縁法師山宗徳院の南宮号乃権

別當ふりかへ盛衰記より

足利公方家東山殿と称し室町殿と称さる

新より文明十六年六月勅名を降して号せ

きしし享幸集にい親長記し

公方家乃法和と殿中と呼義満より時より

称せし殿中年中行事と云如し

丑四月四日大樹吹上乃別法和より法自氏の

詔し呼る五品五有司の制宜しき由法接嫌し

云

昔蒲の石乃戯り起りて少童の

金銀乃首の

外大于形木偶人数多し乃一形地乃

乃一数百乃及に乃不有是を亦時尚乃親

乃一今年四月

受東乃有司金と市井乃

三つ

今歳辛丑春餘寒殊にくけり
けり茶芽は
ゆ乃こ流いつくもくもぬ
こまな乃ゆや芽
うーのうーく唐製よーの

乞漿^漿得酒とい豊年乃す
こまな乃ゆや芽
にゆけさふぬ

東武忍園坂本乃 狼玉院
天名の古流を
のゆ流と称せり
慈眼大師 東叡山創建の初

自乃柳家と尽く世事に譲らる

今神田邊及し新吉原の者
も正月御本坊

まいつて活寂たまはる
むりの例せし

物より一旦烏丸家乃
息院主乃 時新に邪義と

言く此流のゆをゆ
けり日野家

の息某地僧都と昔に遠流に
死せしきこ明院

此邪流を天下に禁
ませり

柳流を後寺号に改
り揚玉院と号
けり

柳大坂天
寺

柳大坂天
寺

土年九月六日火事一後今乃此
移せり享保五年三月廿七日再び焼く
本尊釈迦伽藍

難入三軀ハ清朝乃佛土乃作殊ノ功年と

乃の極類對馬中將家奇附とく天中世も真

言に立川乃邪流無住國師のいた天台に日蓮ノ異流

淨土に一念義乃別解禪にいと僧のつゝも

乃の近世又名門ノ之の邪用禪家ハ正三乃

邪禪のついで慈ひとめめと表田法橋玄

真言變ノ密教支養乃三乃義と云又大日彌勒

一休乃説有く別報覺率乃性生を預り項日河初

九若平山六陰師秘密之心性生要集二巻と解して

予行に生天と却免らまじりしと一乃邪義

に乃の似似一乃世乃下俗と勸めしん

女養性生に去り乃やれんと無相院大僧都亮

談あり

右二條去年忍同にあり一時受り不乃彼西人

乃の冬世春もあきあきしんかこの此

中をいしむし〜き〜記〜る

享保六年六月四日ハ傳教大師九百回ノ聖忌
テ山門ノ末寺國ノもと登心寺ニ奉修瑞院僧正乃
言いとぬを中つり候として法にのほり候
又と〜に候にはけりも孝障乃程御心
まの杯書と
是ての世にまはす月圓書の八巻の法ハ
三日ノ夕日法を 寺にも例時や念佛唱

淨土院に勅令傳筆を時行〜まに

おひかりの處のまも縁も杖之洞入り記法

金絲蓮といふ荷花とるゆりよも彼見金蓮草

猶如日輪乃文を〜おひし

光そふ令地蓮のかけハ雪入ハ此を〜

由乃乃〜香とせ〜

大鵬搏風冥海吼 怒声震起走竜蛇

涼雲洗出西明月 沛雨新開五嶽花

行連に竹東の強よん 富士乃雪田子乃信
 たりりー、かゝぬてのふとぬを古郷乃花時息
 月夢て夏日地あゝぬに昔ーと秋風吹種々
 萩地病身に入虫乃鳴きもつれよふ久行々後
 の文月朔六日清いもきもーとて勢州孤野心
 此温湯よせのし山鎮れき谷地旁免りー彼造他
 乃とーの景清と海と見ゆるも嬉しくもおぼろしき程
 のも涼きつれに涼忘地ト夢と何て後乃たしと定記ス



湯本の系

後乃七月七日
 世心湯より
 月夜

夫早乃天此
 山石杯こよふく

とも夕風と待て
 出りて

南

世東表
 湯と
 温泉有リ

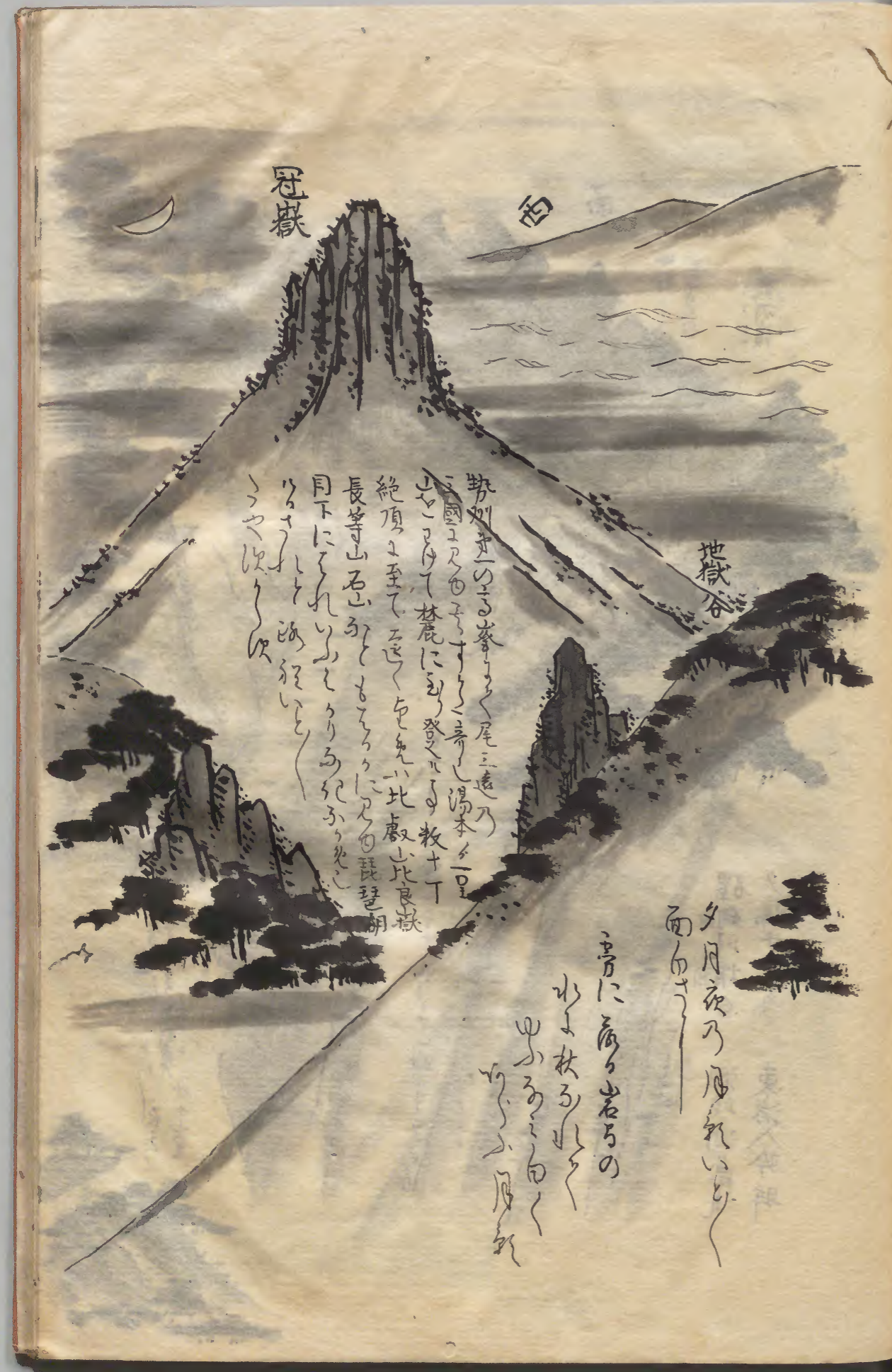
雨晴雨奇、白雲隈
 病骨忽清暖眼用
 竟水温々非待興
 遊入幸得上春甚

世東表

温泉

北

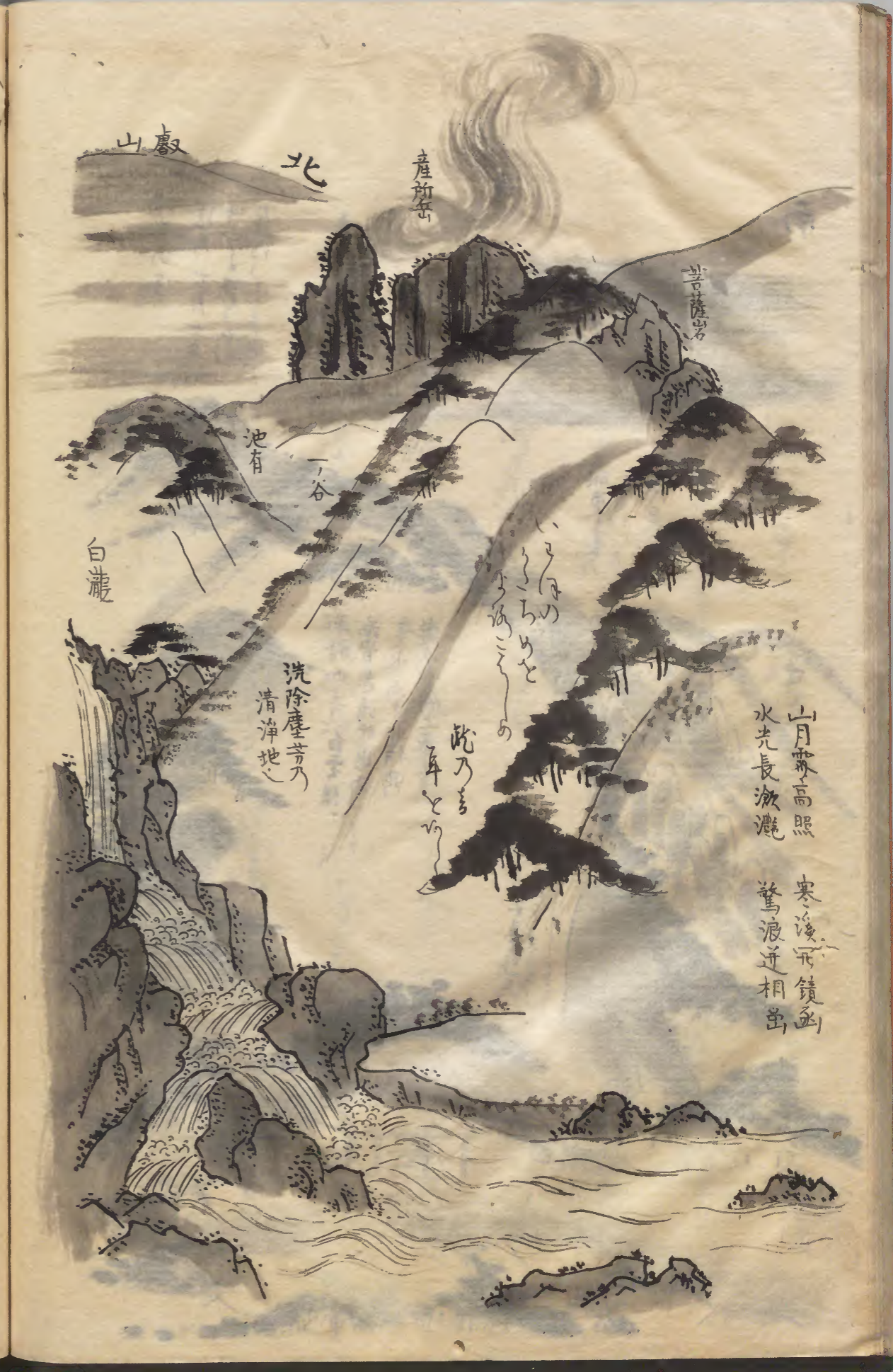
世湯
 表
 湯と



勢別寺のさる峯より尾三遠乃
三國よりそのすしつ湯本より
しこりて麓に到り登るに教十丁
絶頂に至りて是を北嶽と比良嶽
長等山石のそももろくにん月夜朝
月下にこれりしりふりふりふり
りふりしりふりふりふりふり
りふりしりふりふりふりふり

夕月夜乃月夜いり
面より

音に海ら岩らの
水よ林のり
山ありあけ
りふり月夜



山月露高照
寒波逆相出
水光長激瀧
鷺浪逆相出

此乃言
年とり

荒峯佳景一何長
 万頼割愁薜蘿涼
 忘了白頭臨鐘恨
 獨隨雲樹老誰妨
 玉屏卷翠晴堂
 洞水潺湲任繞牆
 滿月瑠璃螢眼界
 穩餘閑事臥空堂



湯元
 湯元二小寒水
 一和竹の温泉いづつ
 大已貴今下乃林にる
 中と可いかな

二本松

神乃免くま
 二輪川地清死

流きこころ
 海に

東海
 こころ
 えり

湯元

此南のふら谷といふ
 有いみく今を好
 一和といふこころ
 ふん石にせぬに奇石あり



湯山入口圖



荒野とまてく山々山々
にむくあき観
かきし

東



北山
見お海

谷川乃
山名
秋音
松々
やゆ

灰の庵
常盤

正徳
新多
松

ま白く寒と薄い霧を頭で感じ観列峯
乃巖き一産不岳嶽々一帯に高々と帯
ひ天石自花實乃果と益く之乃境玉と
噴下一簾乃秋水神意波影を横山領例言を
眼に借一清風微雨詩情を助くる白虎心
九江の詠羅浮せよ此境もかく中をさるる東
月と道をも海原天影と接し遠近の舟
帆を穿るは高士乃無秋といふれ法巧

乃翠夕定し尾城樓臺海門よりく葉名の粉
蝶の園色一歩とくせし詠新に首と先
くせそ望雲ありる山行乃波光天岸三山乃
秋色月東西見る月といふくわゆるか
古々の人々と吟とまに一他境乃客と詠
と等しくして聯及合暉に笑ひ絲竹も不
く声おかくく物よる下戸ありぬ袖より
吾と甲しは入隅乃人面と吟く教り

竹にまゝかきつる者もあらずも新に別れ
しとのりて今更けりて胸中より観人高と
いふまゝに浮世乃ち非常とけ時にさすまゝ
中日教へて下山しつるまゝ宿に隣りし
書付のり

いまだしぬ病をけ衣立つるものも度ほらんと先
之流十列きのふ乃ちまゝとけりし風声のきき
海も明くまにふれり

菰山澗水清く急な流にくまなく

さらばつゆこころに潔く急な流に

あついと速く流るる魚のり

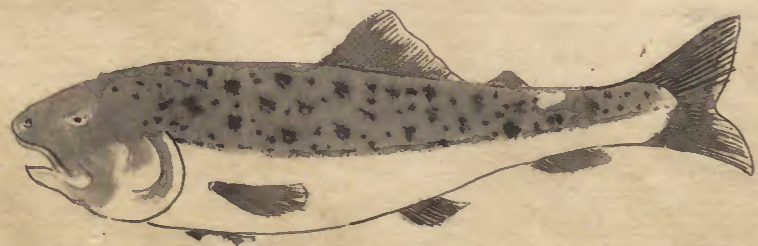
蠅頭して釣るる魚のり

魚のり毎の六月十六日ゆへ細川

大神宮に供へて十七日とて虚氏

こころにまゝとて釣るる魚のり

ま佳味し亦産るる忘上に湖

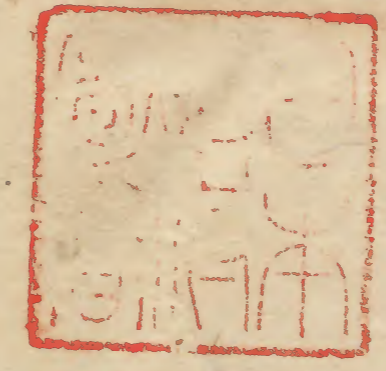
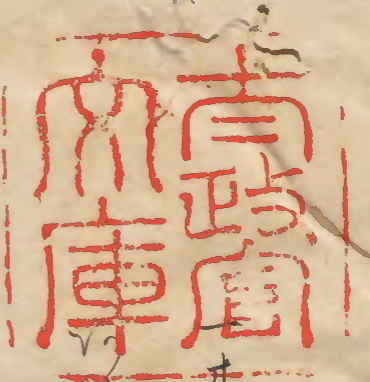


洞水不随恨

海頭存旭日

便人動片心

更伴断猿吟



まのこゝろの葉らゝめ
人乃るらゝめ
まのこゝろの葉らゝめ
別々縮乃ワ

2

